9月9日

国際青年育成交流事業既参加青年及び日本招へいラオス青年との交流 (Interaction with Lao Youth to be invited to Japan)

訪問先都市

ビエンチャン

コメント

本事業の最初にラオスについての概要説明を伺うことができ、また、実際にラオスの方々と接する良い機会となった。ラオス招へい青年は皆英語が流暢であり、交流会の場においても全員が協力してスムーズに進行していた。アイスブレークのゲームや、昼食の時間を通して親交を深めることができた。会話をする中で、ラオスの大学生の日常を知ることができ、興味深かった。

ラオスの山の子ども文庫基金 図書館活動視察 (Donpaleap Children's Library of Fund for TARO's Library JAPAN)

訪問先都市

ビエンチャン

面会者

コメント

ラオスの子供たちに読書機会を提供するため、約10年前に図書館が建設された。地元の比較的 貧困層の子供たちに「ただ本を読むのではなく、自分で人生をつくれるように」という建設経緯を 伺った。親の姿しか見ることのできない子供たちには、人生の選択肢が明らかに少なく、この安井 氏の取組みに団員は共感した。図書館での学びが子供の人生を豊かに創造することにつながる と感じた。さらに、本だけでなく伝統的なダンスや人形劇の披露を見ることができた。子供たちは年齢に関係なく遊び、いつも笑顔が絶えない場所であった。また、図書館の2階に展示された、子供たちの姿を捉えた写真は考えさせられるものがあった。なぜなら日本の子供とは違い、生活するため、生きるために日常を暮らしているように感じたからだ。本来の「生きる力」とは何かを山奥の子供たちから学んだというお話も感銘を受けた。ラオスの教育システムを改善していくために、自分には何ができるのかを考えるきっかけとなった。

I氏との夕食会

訪問先都市

ビエンチャン

面会者

President, Green Discovery

コメント

I氏はラオスの有名実業家であり、観光業や飲食業など様々なビジネスを手掛けている。今回はI氏の経営するレストランであるKhop Chai Deuでお話を聞くことができた。I氏はラオスの今後の発展と環境問題について、近年はエコツーリズムなどの概念が広まりつつあり、そのようなビジネスの在り方をサポートする必要があると述べていた。

9月10日

在ラオス日本国大使館(Embass	v of Japan in Lao P.D.R.)
はノクス日本国人区站(EIIIDG33	y di Japaii ili Lad i .D.ii./

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	久野和博 公使
	中野美智子 一等書記官
	上川路ゆり絵 三等書記官
コメント	大使館職員の方からラオスの印象を聞かれ、多くの人が思いやりの心を持っていると感じたと伝え
	た。また、大使館の仕事内容を学ぶ機会となった。日本人と異なり、あくせく働かないラオスの人にとっ
	ての幸せとは何か、本事業を诵して議論を交わし、意見を形成していきたいと考えを新たにした。

ラオス青年同盟 (Lao People's Revolutionary Youth Union)

	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
訪問先都市	ビエンチャン
面会者	Mr. Alouxai Sounnalath, Member of Lao National Assembly, Secretary General
	Mr. Somkiao Kingsada, Director General
コメント	青年同盟とは未来の政治家や公務員を育成する政府機関の一つである。本事業を通じてラオスと
	日本の青年が議論をしながら両国の違いや類似点を発見し、チャレンジを克服するための解決策を
	見出すことを望んでいると、Sounnalath氏から励ましの言葉をいただいた。ラオスの若者は古い文
	化やお年寄りを大切にするという日本との共通点や、日本とは異なる内陸国としての立地をどのよう
	にいかしていけるかに着目する機会となった。

独立行政法人国際協力機構(JICA)ラオス事務所

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	押切康志 次長
コメント	1965年に初めて実施されたJICAの青年海外協力隊の派遣国にラオスがあったことから、日本とラ
	オス両国における関係は深い。JICAが支援している内容や押切次長のお話から、ラオスが教育、
	環境、経済において抱えている問題を知ることができた。教育においてはカリキュラムが不十分であ
	ること、環境においてはゴミ回収システムが不徹底で、ごみ処理が成り立っていないことが問題であ
	ると分かった。経済においては若者の雇用創出が問題となっている。それらに対して日本の各都道
	府県が支援を行っていることを知り、支援の面においても改めて日本とラオスのつながりを感じた。

日本大使館員及び JICA 職員との夕食会(Dinner with officers of Embassy of Japan in Lao. P.D.R. and JICA)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	日本大使館員 中野美智子 一等書記官
	JICA職員 戸倉裕子 担当者
	JICA職員 米山芳春 事務所長
	JICA職員 伊藤淳 検察官
	JICA職員 木下雄介 市場調査専門家
コメント	日本では検察官として、JICAでは専門員として勤務している方とお会いした。ラオスでの法整備支援や
	支援を行う上で困難だった経験を伺うことができ、法整備に関心を持つ団員にとって有意義な時間で
	あった。例えば、ラオスは職権主義という裁判官が中心の裁判の進行スタイルを持っているため、心証の
	形成が裁判官で完結するものとなってしまい、弁護士や検察官の仕事がない問題がある。そのため、ラ
	オス政府にとっては法曹の需要がなく、法曹が育たないようだ。ただ、日本ではそれと相対する当事者主
	義を採用しているように、弁護士と検察が相互にそれぞれ違う主張と証拠を提示することによって、第
	三者の立場から裁判官が心証を形成する形が望ましいのではないかと話す団員もいた。また、教育水
	準に関心がある団員は、「常識を身に付けるのは家庭環境によるため、そもそも親の教育が必要になる
	と感じた」と話していた。夕食会を通して、現地で働いている方との接点を持つ良い機会となった。

9月11日			
チャンパー	·サック教員養成学校(Champasak Teacher Training College)		
訪問先都市	パクセー		
面会者	隊員		
コメント	学校内の図書館には、日本のJICA支援による教科書も蔵書されていたが、全体的に最新の教材		
	が不足しているように感じた。また、英語やタイ語の教材が多いため、今後ラオス語の教材を取り揃		
	える必要があるように感じた。数学や化学などの基礎学力が低い原因は先生自身が分からないこと		
	にあると聞き、こうした教員養成学校を存続させ、教育の質を向上させていく必要があると強く思っ		

た。小学校の教員室には教員の子供の姿が見られ、常に5人ほど妊婦を抱えている現状に驚いた。

9 <i>月</i> 12日	9	月	1	2	8
----------------	---	---	---	---	---

チャンパーサック知事表敬(Courtesy call on Governor of Champasak Province)		
訪問先都市	パクセー	
面会者	Mr. Bounthong Divixay, Secretary of Youth Union of Champasak Province	
コメント	ラオスは自国の経済発展だけでなく、タイなど周辺国と共にASEAN経済を作り上げていく状況にあ	
	る。チャンパーサック知事からは、日本人青年とラオス青年お互いの関係を学んでほしいとのお言葉	
	をいただいた。また、表敬前には急遽お茶に招いてもらい、団員一同歓迎に感謝した。相手の気持	
	ちに立って考え、どんな小さなことも尽くすラオス人ならではのおもてなしに初めて遭遇した。	

ラオス青年	に同盟チャンパーサック支部 (Lao Youth Union in Champasak Province)
訪問先都市	パクセー
面会者	Secretary of Youth Union of Champasak Province
コメント	ラオスはビエンチャン首都圏と17の県から成り立っている。チャンパーサック県は、ラオス南部にお
	いて最も大きな県の一つである。事務局長はチャンパーサック県の観光地であるワット・プーや
	JICA支援のことなどを挙げ、チャンパーサック県においても日本と深い繋がりがあることを話してく
	ださった。そして、日本のラオス派遣団とチャンパーサック県の青年がより良い関係を築くことを望ん
	でいるとおっしゃっていた。

ダオ・ファンコーヒー工場(Dao Heuang Coffee Company)		
訪問先都市	パクセー	
面会者	Sales & Marketing Manager	
	Managing Director Champasack Branch	
コメント	ラオスコーヒー最大手の会社で、工場内には最新の設備が整っている。工場では1,000人が労働し	
	ており、コーヒーや飲料水を筆頭に多くの商品を販売している。大量生産を実現させるため、生産ラ	
	インはシステム化され、徹底的な温度管理がなされている。ラオスにおいてコーヒー産業は一大産	
	業であるが、一方で複雑な作業や指示をベトナム人が、単純作業をラオス人が担っている場合が多	
	い。この工場では従業員の7割がラオス人、3割がベトナム人の構成となっている。	

9月13日 チャンパーサック大学(Champasak University) 訪問先都市 パクセー

コメント チャンパーサック大学はラオスの国立大学である。教育学部や経済学部の他、農学部もあり、広大 な敷地を利用した学びが提供されている。日本のキャンパスと異なり、二階建ての簡素な作りの建物 が多く、教育水準の違いを目の当たりにした。学生との交流ではラオスの伝統的なダンスを教えても らったり、日本のソーラン節、浴衣、空手、折り紙などを伝えたりした。楽しみながら互いの文化を学び 合うことができた。

9月14日

パクセージャパン日系中小企業経済特区 (PJSEZ) (Pakse Japan Special Economic Zone)

訪問先都市	パクセー
面会者	事業部長
	日本剣道具製作所
	Deputy manager, Leonka World Lao Co.,Ltd
	新電元
コメント	パクセージャパン日系中小企業経済特区とは、チャンパーサック県パクセーに開発された日系企業
	専用の工業団地で、名前にある通り、中小企業のための経済特区である。今回訪れた三つの工場
	に共通していたのが、手先が器用で視力3.0の目の良さを持ち合わせたラオス人の特徴に着目して、
	ラオスに進出しているということだ。また、チャンパーサック訓練学校と提携しており、この経済特区で
	は現地の状況に合わせた開発が行われていると感じた。

チャンパーサック訓練学校(Champasak Technical and Vocational College)		
訪問先都市	パクセー	
コメント	1981年に設立した専門学校で、PJSEZが雇用を促進している。特に最終学歴が小学校卒業の方には、文化や習慣といった常識に関する教育が足りていない状況がある。そこで、短期訓練を行うことで、働くために必要なスキルになる基礎的な内容を養成する機関である。経済的な理由で学校を中退した人には政府の奨学金で学費を賄っており、約40%の人が利用している。さらに、卒業してからの進路が近隣地域の経済特区とつながっており、就職先が安定しているのは一つの特徴だと感じた。	

9月15日

山本農場(Yamamoto Farm)	
訪問先都市	パクソン
面会者	代表
	プロダクト・マネージャー
コメント	ボラベン高原に位置して、気候や水はけのよい火山灰に恵まれた山本農場は、2012年からコーヒー
	やイチゴ、野菜を栽培している。日本ではコーヒー栽培は90日かかるが、ラオスでは1~2か月で採取
	できることが特徴で、ラオスにおいてコーヒー産業は主要産業の一つである。コーヒーの試飲では、
	香りの濃いティピカや、苦みの強いカトゥアイという種類を味わうことができた。また、人参を収穫させて
	いただいた。普段農業に関わることが少ない団員も多く、大変新鮮であった。農業の楽しさに気付
	き、固定観念を変えることができた。若い人が農業に触れる機会があれば、より多くの若者が興味を
	持つのではないかと感じた。ラオスにおいて観光業が進んで行く中、日本人が経営している農場が
	観光地として広まっていくのを嬉しく感じた。

9月16日

托鉢体験(Giving alms)

訪問先都市

パクセー

コメント

ラオスは敬虔な仏教徒が多く、托鉢を行う習慣がある。托鉢とはお坊さんの修行のことで、ラオスでは15日を1か月として捉えてお祈りを行う。托鉢体験は、団員全員が初めてだったが、違う視点で物事を見る必要があると実感できて、心が洗われる体験となった。また、ラオスで出会った青年たちがマンツーマンで礼拝の仕方を教えてくれるなど、ラオス人の優しさに触れ、有意義な文化体感交流となった。

ワット・プー遺跡(Wat Phou)

訪問先都市

チャンパーサック県内

コメント

ワット・プーは2000年に「チャンパーサック県の文化的景観にあるワット・プーと関連古代遺産群」として世界遺産登録された。王朝を築いた人々はクメール人であり、10~14世紀ごろに建立された。プーは山を意味し、ワットは寺を意味している。バライという人工池や宮殿の遺跡群、リンガの石垣で飾られた参道を通り、ラオスの国花であるチャンパーの香りがする石垣をよじ登ると、祠堂へと行ける。何段もの急な石垣を上がっていった後に見える、ラオスを一望できる風景や美しい本堂はすばらしく美しく、頂上まで登ってきて本当に良かったと感じさせるものであった。美しい本堂は5~6世紀ごろには既に寺院が存在したようだが、現在のものは11~13世紀に建てられた寺院である。壁には細かな彫りがあり、今も残っていることに感銘を受けた。また、本堂の中は上を見上げると太陽の光が差し込んできて神秘的であった。

9月17日

特定非営利活動法人アジアの障害者活動を支援する会(ADDP)

(Asian Development with the Disabled Persons)

訪問先都市

ビエンチャン

面 会 者

プロジェクト・コーディネーター

プロジェクト・コーディネーター

コメント

障害者の社会自立を目的として1992年に設立し、就労支援やスポーツ支援を行っている団体である。ラオスにおいて障害者支援は十分でなく、戸籍のない人もいるため、実態を把握できていないというお話を聞き衝撃を受けた。団員は卓球バレーやウエイトリフティングを体験し、健常者と障害を持った方が垣根無く楽しんでスポーツすることの魅力に触れることができた。2020年の東京パラリンピックでも各競技に着目して観戦したいと思う。

ラオ・ブリュワリー株式会社(Lao Brewery Company)

訪問先都市

ビエンチャン

コメント

ラオ・ブリュワリー株式会社は1973年に創業し、年間300万リットルのビール、1.5万リットルの清涼飲料水、120トンのアイスを生産している。ペプシやラオスビールは、田舎であっても国内全域に流通しており、ラオスの人々の生活に欠かせないものとなっている。5S(整理、整頓、清掃、清潔、躾)やKPI(重要目標達成指標)といった、日本の管理体制をそのまま使っているのは誇らしかった。お金ではない日本の支援のあり方を感じた。さらに、メコン川の水を自社工場で濾過、殺菌して使用していることに驚いた。工場内での衛生面での管理体制は整っているように感じたが、ラオス国内の基準、監査はどうなっているのか気になった。また、気圧や気温によって炭酸の具合は変わってくるため、1時間ごとに品質チェックを行っていることに感心した。日本の場合、工場内のエアコンで温度・湿度をある程度一定にしているが、ペプシ工場では、生産ラインにエアコンなどはなかった。そのため、品質チェックは日本以上に厳しく行う必要があると感じた。

9月20日

ナムグム・ダム (Nam Ngum Dam)

訪問先都市

ビエンチャン

コメント

ナムグム第一水力発電所は、日本を含むドナーの支援を受けて作られた、ラオス電力公社の最大 の発電所である。ラオスにおいて水力発電は重要な産業の一つであり、管理施設では専門家に よって厳重に管理されていた。ダム湖の中では、クルーズをすることができ、観光資源としても重要 な存在であると感じた。

塩田(Salt Farm)

訪問先都市

ビエンチャン

コメント

暑い国にとって、塩は命に関わる重要な産業である。地下水から塩を採取する内陸国ならではの仕組みに驚いた。しかし、塩産業は1kg17円程度と単価が安いため、労働力に見合った収入が得られていない現実がある。この塩田では、一日当たり700kgの塩を生産している。他の訪問施設とは大きく異なり、本当のラオスの人々の生活は環境が良くない中、重労働をして何とか生きていることを痛感した。日々の食卓を支えるためにはこうした人の働きぶりも忘れてはならない。今まで見られなかった一面を目にして、こういう世界を変えていきたいと思った。

9月21日

コープビジターセンター(Cope Visitor Center)

訪問先都市

ビエンチャン

面会者

Marketing Assistant

コメント

ラオスに大量に残された不発弾の被害者のために、義手・義足の製作やリハビリサービスを提供するラオス唯一の団体である。ベトナム戦争により、ラオスの首都は爆弾の被害を受けた。1ヘクタールに広さを不発弾除去するのに10日以上を要するため、今も不発弾が残っているのが現状である。特に山間部では不発弾除去が遅れている。延べ8,000人が被害を受け、毎年約40人、その内4分の1程度は子供が犠牲になっている、現在進行形の問題であることを改めて考えるきっかけとなった。

9月23日

日本招へいラオス青年とのバーシーセレモニー

(Baci Ceremony with Lao Youth to be invited to Japan)

訪問先都市

ビエンチャン

コメント

バーシーとは、一年の健康や家内安全を仏に祈るラオスの伝統儀式である。健康や学業成就などの願い事を言いながら相手の手首に木綿の糸を結ぶ。この儀式に実際に参加して、改めてラオスの方々の思いやりの心の深さに感動した。糸を結ぶ短い時間の中で、心の奥底で思いのやり取りをしているような実感を得て、感銘を受けた。

<u>歓送夕食会(Cultural Exchange Program, Farewell Dinner)</u>

訪問先都市

18 エン/ モュン/

コメント

これまでお世話になった団体の職員の方々やホストファミリーの方々が参加してくださった。お互いの文化発表の際には大変盛り上がり、ともに日本とラオスのダンスを踊ったり歌を披露したりした。ラオスの方々との最後の交流ということもあり、温かい言葉をたくさんいただいて、改めてラオスの方々の親切心に感銘を受けた。

9月24日

評価会、成果発表会(Evaluation and Presentation)

訪問先都市

ビエンチャン

面会者

Mr. Somkiao Kingsada, Director General

コメント

ラオス青年同盟の事務局長Somkiao氏の前で、ラオス派遣団が18日の滞在の中で学び感じたことについて、英語でプレゼンテーションを行った。Somkiao氏は頷きながらメモを取り、団員の話を注意深く、熱心に聞いてくださった。発表内容は各訪問先で得たことやラオスの国民性を中心に、自身の将来像を伝える団員もいた。プレゼンテーションの後は質疑応答を行い、環境や教育、若者の雇用創出などについて話し合うことができた。学んだことを事後活動にいかしていきたい。













第2章 日本青年海外派遣 第2節 ラオス派遣